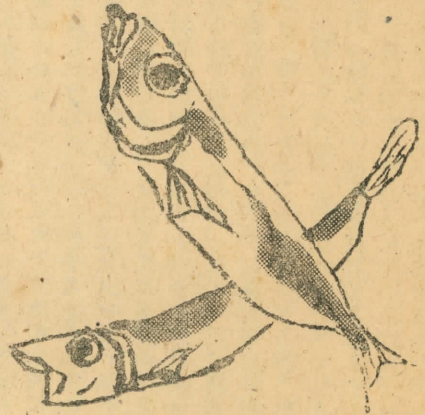




文

樂



海

文 樂 愛 護

守 隨 憲 治

號 六 第 卷 二 第

先日情報部に勤めてゐるK君が來ての話に、操りでも歌舞伎でも、最近の見物層よりも米人の方が遙かに深い理解を持つてゐるから、是非紹介したい、便宜を計つてくれといつて來た。今までとは違ふ。僕も大いに乗り出さうぢやないかと賛成した。察するに、米人の愛好者が大いに見物してくれて、何とか批評するとなると、その尾鰭について又見直さうとする、といふ様な所に落付くのではあるまいか。こんな問題にも民主主義の徹底が欲しいものである。そこでこの際、世界に例のない、日本の操り劇、今日残つてゐる所では文樂座の演出、これに何とか有力な愛護方法を講じたいものだと思ふ。否、講じなくてはな

らぬと思ふ。前にかういつた人がある。大阪は新計劃をもち立てる處、東京はこづき廻してぶち壊す處と。成程さうだ。遠い竹臺は、今言はず、明治になつてから、新歌舞伎然り、新派然り、レヴュー然り、新劇然り。かぞへ上ると、東京での旗上げは大抵失敗に終つて、皆大阪が育ててゐる。尤も大阪での演技が東京のと比較して、果して秀れてゐるかどうか、夫は問題だが、大阪風と東京風との相違は昔から指摘されてゐる。とにかく東京とは違つた風格があり、それとも何等かの關係があるのだらうが、藝を愛護し育てあげようとする意欲と實行力は、確に大阪にあるといへる。わたしはそこで文樂愛護運動が大阪を地盤として起きたいものだと思つてゐる。文樂藝術はやはり大阪に於いて、發達し成長したものだ。江戸にも義太夫節より古くは肥前の系統が底流したと見られるし、その後は豊竹流が脈を保つたし、今日の東京流の語り口が必ずしも義太夫節に反するものとは一概にいへまいと思ふが、しかも文樂座の存在は義太夫節の主體たる位置を拵がすものではない。

そこで愛護運動がただ義太夫好きとか最良連中とかが集つて、見解を披瀝して基金募集などやつた所で、金の集るものではない。集まつたにしても昔と違つて大した額になる筈がない。それを大夫や人形遣に分けてもすぐ消えてなくなるだけのことだ。半ば公の事業として實行するのでなければ意味をなさぬと思ふ。それを大夫や人形遣に分けてもすぐ消えてなくなるだけのことだ。半ば公の事業として實行するのでなければ意味をなさぬと思ふ。その母體は大阪が動き出すのでなければならぬ。その上に全國的な運動化することである。どこまでも古典藝術の愛護といふ點に標榜したい。

直接の問題となるのは、大夫や人形遣の生活援助といふことにならう。文樂の大夫に何の援助が要るかといふ人があるかも知れぬ。その通りだ。しかもそれが又深刻な害を流してはゐまいか。修業苦を嘗めてゐた時代の天才が長ずるにつれて鈍物化してしまつた例は幾多ある。所謂天才と雖も人間だ。人間的誘惑に大抵は負ける。負けるだけなら回復の仕様もあらうが、天才性を破壊して終るのだ。さうなると凡人以下に墮してしまふ。大夫にもなる筈の才を抱きながらどうしても町のお師匠さん以上になれずに終るとは何たることだらう。彼の爲に天魔破句ともいふべきものは第一に金だ。金のために修業の熱意を失してしまふ。凡人の爲の生活の安定は畢竟生活を高く視下さなくなつてしまふのだ。眞面目に考へようとしなくなるのだ。自己を不純化してしまふのだ。藝道の人には特に此の弱點が目立つ。生活に打負けぬこの種の考へ方が實行出来る人物は、それこそ大夫になれる人物だ。そこに眞實の藝術家がある。第二は女だ。女が發散する性への蠱惑、これはあらゆる社會を被ふ。余りにも卑近であるかも知れぬが特に藝道の社會には根深く交渉する。藝のもつ性格的なものが女性を誘ふ、こゝに第一階梯を置くのだが、やがて其の藝の主たる人が、人間性の弱點から、逆に誘はれてしまふのである。女性側も多くは、先づ藝格そのものに接しようとするのだが、強く抱へようとして進む中に、その人を把へるのだ。その人の藝を把へるつもりで何時の間にか、その人間を把まへてしまふのだ。刺激の強さ感性の鋭さは、その交渉を異常な深みに陥れる。終に藝を決裂に逐ひやる。

かういふ部分の生活がどこから開けるかといふと、御最眞制度からだと思ふ。制度は無くなつてもその事實は綿々として續いてゐる。結果からいへば最眞の引き倒しなのだ。最眞にしても藝の進境を意圖して、指導するものなら此の上ない理想的なものなのだ、又それをのみ尊く享くべきなのだ、別な所を目標として最眞するし、こちらも夫を享けたいと希ふ。寶曆の昔、更に享保の古、竹本、豊竹への最眞は眞劍に苦言を呈した。その苦言が太夫の位置を左右するものでつた。興行師、つまり當時の座元はよくこれらの苦言を参照して太夫を扱ひ企劃も立てた。當年の最眞連中もかうした意味では昨今のものと余程違ふ。連中の主體は男性の側が占めてゐた。最眞する意味は公開された。若し不當な場合があると必ずその反駁が起きる。太夫はどうしても之を無視してはゐられない。この様な時代だつたから義太夫淨瑠璃が發達したのだともいへる。而して連中の多寡即ち人頭のみがその太夫の地位を高下さす力ではなかつたのだ。現在の様に切符が捌けた數は應じて語り場を動かしてやるとか、給金が高下するのでは御最眞の御機嫌伺ひに憂身をやつす。媚態を捧げるまでになるのが當然であらう。御機嫌伺ひを中斷せぬ爲に絶えずその爲の資力を考へなくてはならぬ。彌々蔭の生活を選ばなければならなくなる。表面を華かにするにつれてこれらの環的消費面が擴大するだけだ。結果において何が身についたか。

興行の組織が悪いとか、興行師がいけない、資本主義が宣しくない、といふ非難も一應はあらう。その昔も竹田近江の如きは、大富豪の生活を營んだが爲に、終に當局によつて整理せられるに至つた。太夫や人形遣が勉強して札を捌かないと良い役がつかないとか、會社の覺召しが悪いとかいふのも、會社からいへば理窟もあらうが、あの竹田一家が竹本座をもり立ててゐた様な愛情とは些か質が違ふやうに思ふ。尤もそれとも最近のわが國の大轉換期にあつては、會社そのものが所謂民主的とならざるをえなくなつたのだから舊態依然といふことはあるまいと思ふ。そこで問題は寧ろ太夫人形遣側に逆戻りする。ここで自覺しなくてはならぬ。藝道人として深き反省と更生とが必要である。その上に自活の道を講ずべきだ。その意味で、過去のパトロン階級が解消したことは天の恵だといへる。新たなるパトロンを何處に求むべきか。第一には自己に見出さなくてはならぬ。己れの藝に自活の能力ありや否やと。時代が改まるとはいへ、これだけ練磨された義太夫節と人形操の深い藝術が、七百萬の人口の何千何百分の一の人をすら引きつけられないといふ筈はないのだ。大阪市の人口だけから考へても、文樂一ヶ月の興行が立ち行かないといふのは、興行師側よりも太夫人形の方面に相當の責任が考へられていゝのではないかと思ふ。自覺反省といふことは、單に觀念的の意味ではない。現在の名技といはれるものが果して名技であるかどうか。觀衆が褒めたといつてももつと感動さす方法が無いかどうか。一時代前の名技に比較して進歩してゐるとすれば何處が何う進んだか。小手先の藝か腹の底から出てゐる藝か。徒らな人氣寄せの語り口や遣ひばかりでないかどうか。抑々文樂藝術とは如何なる點

に位置ありとするか、これは大問題で、當事者以外の解釋研究にまたねばならぬ所が多いが、大夫や人形の人々も、己れの人氣に甘んぜず、先輩先祖の藝を心から仰ぎ、研鑽を重ねなければならぬと思ふ。吾々素人が考へた程度でも、書卸時代の演出とは非常に變化してゐるものがあつて、果してこれがいゝかと疑問を投げる場合も往々にして見出される。この様な意味での行動を反省自覺と呼びたいのである。社會狀勢の變革に際して此の様な方法による所の愛護運動を實現したいものだと思ふ。

(第一高等學校教授)

あす組さきのふ組

兼 常 清 佐

1

今日、けふといふものは妙なもので、それは昨日、きのふの續きとも思はれるし、また明日、あすへの門出だとも思はれる。古典派は確にきのふ組である。きのふ出來たものをけふも楽しんでゐられる人々である。しかし世の中にはあす組もある。何か新しいものを作り出したい人々である。きのふ組からあす組を見ると誠に薄つぺらなおつちよこちよいである。あす組からきのふ組を見ると、ただ生ける死かばねである。これは何にでもある事で、別に藝術だけに限らない。

きのふの物を尊ぶと言つても、それは一昨日、おととひの物から見れば、やはりあすの物であつた。やはり新しく出來た物であつた。それできのふ組とあす組のけんかは長い眼で見れば何もけんかするほどの事ではない。

私はもちろんあす組である。そしてオーサカは昔新しい歌人ヨサノ・アキコを産み、ニッポンの文學に新しい命を吹きこんだあす組の本家本元でもあつた。今あす組の私はそのオーサカのきのふ組の方々にニッポンのあすの音楽のお話をするのも、ちよつとお慰みかもしれない。

2